

田舎医者

川島 清

行田市医師会員になって35年が過ぎて68歳になってしまった。よく「少年の1日は短く1年は長い、しかし老人の1日は長く1年は短い」と言うが、第一線の医者にとっては1日は短く確かに1年はあつという間に過ぎ去ってゆく。振り返るとよくやってきたなど感無量である。

当時は今のあさひ銀行で常会をやっていて産婦人科関係では斉藤、田代、村越の先代の名医が揃っており30才代の若輩の私にとっては身も竦む思いであった。父 敏雄の病気で止むをえず生まれ故郷の須加に戻ってきたのだが、いま少しの東京の遊学生活には後ろ髪引かれる思いがあった。

なにせ田舎の事で何でも診させられた。眼科、耳鼻科、皮膚科、加えて弟の胃腸科の指導で虫垂炎、鼠径ヘルニヤ、ホワイトヘッド、さらに包茎の手術までやり、アッペは600例位に上った。当時は創が小さいのが流れになっていたので、最初のころはアッペを探し出すのが大変だった。月並みだがやはり慣れるのが大切である。往診し、患者と布団を含め、入院一式をスバルの後部座席に詰めて運んで来てやったり、サービスには心掛けたものだ。

当時は往診が大変多く、今の循環バスではないが、何処から何処へと大体コースは定まっており午後1時位から出て5時間位かかった。インフルエンザ流行時にはメチロン、メヂコン、ザルプロ等を箱のまま車に積み込んで20ccの注射器がなくなると患家で煮沸消毒をして、夜10時頃帰宅する有様だった。患家でふるまわれる煮込み手打ちうどんのなんと美味しかったことか。

池畑先生からは「往診は時間がかかる。その分、家で診れば何人も診れるのではないか」と言われた。このお言葉は私への発奮の意味でも凄くインパクトがあった。今でも忘れられない。だって、当時は未だ車も少なくバスもなく田舎では来てくれる患者は少なく往診するしかなかったのだ。町の先生は良いなあとしみじみ思った、そして患者は少しこじれると町の医者に行く。魚と同じように患者はのぼるものなのだと、何度、口惜しい思いをしたことか判らなかつた。町の医者は偉いんだなあをつくづく思ったものだ。

挙句の果てに県当局から往診が多すぎると監査を受ける始末で大目玉をくらった。この時は今は亡き野口仁会長、中村先生に大変ご厄介を賜りました。

この時に私は矢張り町へ出なければだめだと決心が固まった。それにはもう一つ理由があった。実は私たちの結婚に際し妻から5年以内に町へ出るという約束があったのだ。なにしろ華の札幌すすき野から食用蛙の鳴いている田圃ばかりの須加に来たのだから。その時はもう約束の1年を過ぎていたのだが、そこそこ貯金も出来たしこの利息で生活できるし、私は町へ出るのが億劫になっていた。ここで改築してこのままやっていこうと妻に言ったら、「それでは約束が違う私は承知できません。私が出るところを捜します。」と言われてしまった。そして妻はたまたま深谷に土地があった関係で、その辺りの産婦人科患者になり偵察するという涙ぐましい身を挺しての行動をとった。そして結論的に深谷は冒険過ぎる、矢張り行田市内に出ようとの結論に達した。そして結局妻がよく買い物に行った長野広小路の魚屋さんの世話で富士見町に

出てこられたのだった。女子高移転前のことで近くに家もろくになかった所で蓄えは土地代に消え、日銭で銀行に建物の借金を返してゆき、そして段々どうにか暮らせるようになっていった。

その時町へ出る事、サーモコン造りの設計図を当時開業していた胃腸科に見せたら冒険過ぎると反対されたのを今では懐かしく思い出す。

昭和42年11月父が急死し、相次いで43年2月には薬剤師で飯能に嫁していて2才の幼児と乳飲子を残し我々兄二人医者でありながら乳がんで妹幸枝が31歳で手術を4回やり壮絶に死んで行った、かわいそうだった。いい人は早く死ぬ。そして同年4月川島産婦人科が19床で富士見町にオープンできた。

何かと女性遍歴が多かった夫をなくし逆にほっとし、また可愛い娘を失い気落ちしてか、それからの母は一気に痴呆が進んでいった。その母を妻は懸命に介護し、そして昭和48年にその最後を看取った。私達子供にとっては本当に有難い母だった。この時の私達夫妻の老人に対する思い入れとその体験が老人福祉の重要性を認識させ、その後の私共の老人福祉事業の展開に向かっていったのだった。

～社団法人行田市医師会 創立五十周年記念誌より抜粋～